

林芙美子と尾道

文学のまち尾道

古い絵葉書と名物観光ガイドによる尾道文学散歩



文学のこみち「放浪記」 昭和40年(1965)設置 第二尋常小学校時代の恩師で、芙美子の文才を当時から見出していた小林正雄の筆

2021年〈令和3年〉は、林芙美子没後70年にあたります。

1903年〈明治36年〉12月31日生 - 1951年〈昭和26年〉6月28日没(47歳)

九州から行商の旅に出た父と母、娘の3人は汀(なぎさ)を駆ける汽車の車窓から街中に日の丸の旗をかけた海辺の町に興味を持ち、尾道駅に降り立ちました。



「此の町は、祭でもあるらしい、降りてみんかやのう」

母も經文を合財袋にしまいながら、立ちあがった。

「ほんとに、綺麗な町ぢや、まだ陽が高いけに、降りて辨当の代でも稼ぎまつせ」

で、私達三人は、おのおのの荷物を肩に背負つて、日の丸の旗のヒラヒラした海邊の町へ降りた。

驛の前には、白く芽立つた大きな柳

の木があつた。柳の木の向ふに、煤で

汚れた旅館が二三軒並んでゐた。町

の上には大きな綿雲が飛んで、看板に魚の繪が多かつた。

風琴と魚の町より

九州の思ひ出

林芙美子

私は幼年時代を九州でおくつた。水際に近い町や、広い河の流れてゐる平野、小さい彎のなかの島、そうした粗朴な思ひ出が私をそだててくれた。櫻島が最初に噴火したあと、私は、母の郷里である櫻島の古里村でしばらく暮した事がある。岩間の崖の上につゞいた細道をはだして歩いては温泉に行った。夜は提灯をつけて、朝は防波堤にきものをぬいで、石で飛ばないやうにおもしをつけて、原始的な汐湯にはいる。何となく媚めいた島であつた。夏も冬もない島のあたゝかい思ひ出が浮ぶ。漁船が入江の崖下にはいつて来ると、ほら貝が吹かれた。ぴちぴちした魚が買へるのだ。楠木の繁つた木陰もあつた。巡査が下帯一つの裸で棒を持つて歩いてゐた。家では豚をかつてゐた。朝も夕べも太陽は海の上にこまかな輝きをふりそそいでゐた。海気の濕つた夜は、馬鹿に月が大きくて、私は裸で防波堤に寝ころびながら、宙に浮いてゐる月を見るのが好きであつた。まだ学校にもゆかない幼い年である。人間は何故着物を着るのか不思議であつた。鹿兒島の町から来る客があつくるしそうにきものを着てゐるのがおかしかつた。私はみじかい腰巻一つで島を歩きまはつた。つれの子供もみんな裸であつた。私は船が好きであつた。船はどこへでも自由に行ける。泡を巻きあげて船はいつも忙はしそうな旅地をくりかへしてゐる。



おのみち林芙美子顕彰会 副会長 山口 真一

おのみち林芙美子記念館に直筆原稿「九州の思ひ出」を常設展示

『九州の思ひ出』は林芙美子の幼少期の思い出を綴ったもので、平成21年(2009)、神田の古書街で出会いました。未発表の直筆原稿が発見されたことは研究者の間で話題になり、マスコミでも大きく取り上げられました。おのみち林芙美子記念館では『九州の思ひ出』直筆原稿を常設展示しています。九州から父や母に連れられ、尾道にやって来るまでどんな心境で幼少期を過ごしてきたかが詳細に描かれています。「親が貧しくても子供は少しも辛くはないのだ」、芙美子の声にじっくりと耳を傾けていただけましたら幸いです。

浪六のものなぞ好んで読んだ。
佐世保も一年あまりで、佐賀にうつり、唐人町とか云つたところで暮した。学校へは

際立つた思ひ出として、私は九州の幼い日の生活を忘れる事が出来ない。非常に貧しかつたけれども、私が貧しかつたのではないのだ。私はそのとぼしさがあたりまえだと思つてゐたし、かばちやめしを食べる事が常住だつたので、それが人生だと思つて、自然とたはむれてゐる事だけが愉しかつた。或家の垣根のバラの花をみて夢かと驚き、蝶々を見て、天国の使ひだらうと空想し、

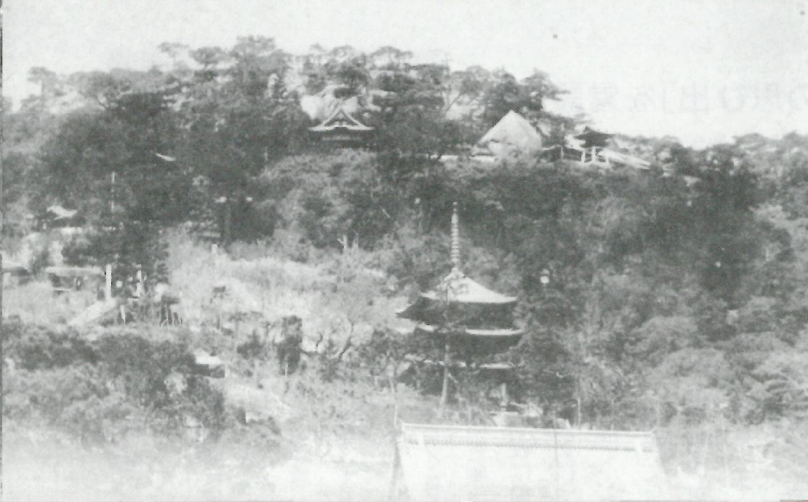
遠賀河の河添ひの草原に、一日、牛と暮してゐた思ひ出、河辺に行くと、いつも明笛がきこえてゐたやうな気がした。幼い年代には、何事にも貧弱だとか、單調だとか云つたものはない。どのやうな環境も子供にとつては幸福な天地なのである。

長崎へうつる前に若松と云ふところにもゐたことがある。勸工場の中に住んでゐた。佐世保では近所に雑誌屋があつて、少女の友と云ふ雑誌が好きであつた。川端龍子が少女の表紙を描いてゐた。ポンチ絵と云ふのも面白かつた。狐の嫁入りなぞ面白くてたまらなかつた。貸本屋から母が本を借りて来ては私に音読させた。双子美人、水戸黄門、不如帰、猿飛佐助、どれも愉しい読みものである。ここではラミーと云ふ系つなぎの内職をした。九歳の私は声をはりあげて本を読んだ。

何処の町へ行つても貸本屋だけは注意して、いろんな本を借りて読んだ。探偵小説や、怪談物が好きであつた。学校には魅力を持たなかつた。何しろ、幾度も小学校を変へるので、友達も出来なかつたし、落ちついて勉強をする気になれなかつた。鹿兒島では山下小学校と云ふのに行つた。学校へ入学した日に、校庭に硝子を食べる男の見た世物が来て、これだけは面白かつた。男女共学の組だつたので、妙にこの学校の印象が深い。級には、樺山とか、鮫島とか、島津、新屋敷とかの姓の子供が多かつた。私はカジヤ町とか云ふ町に住んでゐた。家の後を甲突河が流れてゐた。そこ、母と別れて暮してゐたので、私は虱だらけになつてゐた。

しどみ貝をたて、貝殻の天然の渋い色あひを不思議に思つたものだ。母が貧乏をかこつて、父に泣いてゐた事もしばしばである。私は少しも悲しくはないのに、何とかして泣かなければ、母に済まないとおもひ、無理にあくびをして涙をためたりもした。親は貧しくても、子供は少しも辛くはないのだ。子供の知つた事ではないのである。結構、子供は四囲いたいが愉しいのだ。風にも雨にも天然の妙を感じるし、管で聴くレコードの音にも驚く、一食位はぬかしても、町をほつき歩いてゐる方が愉しい。

寺へ遊びに行つて、広い本堂の中へまぎれこんで、そこで寝込んでしまつた一夜もあつた。映画館の豊敷に寝た事もあつた。不逞しくもないやうな暮しむきであつても、ふともないやうな暮しむきであつてみれば、子供にとつては、広い豊敷は天国のやうなものであつたのだらう。世界は無限に広い感じであつた。学校へ行く事よりも町を歩くのが好きであつた。友達を持たなかつたせい、九州の景色だけはいまだに、眼に鮮かに浮んで来る。



①尾道駅＜風琴と魚の町＞
林芙美子親子が九州から汽車に乗って尾道へ来たのは1916(大正5)春。芙美子13歳。

②＜風琴と魚の町＞に登場する「街角の医者」清水医院のあったところ
『街角の医者』の家を叩くと、車夫は寝ぼけて私がいまだかつて、聞いた事がないほど丁寧な物言いで、いんぎんに腰を曲げた。』

③東予桟橋のあったところ
初恋の人・因島の岡野軍一が利用。1921(大正10)5月、祖父宮田惣助(実父麻太郎の父)の葬儀のため、ここから壬生川・新町へ(現在東予市)

④旧藤原タバコ店跡(現、パンのなる木)
1920(大正9)女学校3年の頃、二階を間借り。岡野軍一の親戚の店。通学船の乗り継ぎで立ち寄った際、二人は会っていた。
芙美子遺跡碑『林芙美子が多感な青春時代を過ごし林文学の芽生えをはぐくんだ家の跡です』昭和39年、NHK朝の連続テレビ小説「うず潮」放映記念で建立。通りの名を「うずしお小路(しょうじ)」と名付けた。

⑤芙美子像
1984(昭和59)高橋秀幸氏製作。毎年6月下旬に芙美子を偲ぶ「あじさいき」開催。このあたりに神武天皇遙拝所があった。『小学校へ行く途中、神武天皇を祭った神社があった。その神社の裏に陸橋があって、下を汽車が走っていた。』＜風琴と魚の町＞

⑥芙美子旧居(現、おのみち林芙美子記念館)
1917(大正6)旧宮地醬油屋、母屋南二階に移り住む。ここから女学校へ入学した。宮地家は芙美子を側面から援助。

⑦ざくろの木と井戸のある家＜風琴と魚の町＞のモデル
土堂小学校の石段のそば。『この家の庭には、柘榴の木が四五本あった。その柘榴の木の下に、大きい囲いの浅い井戸があった。』

⑧尾道第二尋常小学校＜風琴と魚の町＞(現、土堂小学校)
芙美子は5年生に編入される。『随分、石段の多い学校であった。父は石段の途中で何度も休んだ。(略)校舎の上には、山の背が見えた。振り返ると、海が霞んで、近くに島がいくつも見えた。』

⑨石畳小路(いしだたみしょうじ)＜風琴と魚の町＞
『市場が近いのか、頭の上に平たい桶を乗せた魚売りの女達が、「ばんより！ばんよりはいりゃんせんか」と呼び売りしながら通って行く。』

⑩尾道警察署跡(現、尾道商業会議所記念館広場)＜風琴と魚の町＞
父がインチキ化粧水を持って捕まる。『父が、その母の前で、巡査にびびりピンタを殴られていた。「さあ、叩いてみんな！」父は、奇妙な声で、風琴を鳴らしながら、「二瓶つければ雪の肌」と、唄をうたった。』

⑪尾道商業会議所(現、尾道商業会議所記念館)
1931(昭和6)、二階議場で芙美子が文芸講演会を企画開催。講師は井伏鱒二。横山美智子が飛び入り参加で協力。母校正門での記念写真は、おのみち林芙美子記念館で展示。

⑫住吉浜、中央桟橋付近
白壁の並んだ肥料倉庫があった＜放浪記＞『「小便がしたか」(略)私は、あんまり長い小便にあいそをつかししながら、うんと力んで自分の股間を覗いてみた。』＜風琴と魚の町＞

⑬中浜通り
1921(大正10)女学校4年生頃、当時林原帆布店倉庫の二階を間借り。卒業後、ここから上京した。

⑭料亭“竹村家”
1942(昭和17)壺井栄と江田島海軍兵学校の帰途、恩師や級友たちに歓迎された。集合写真は、おのみち林芙美子記念館で展示。

⑮尾道市立高等女学校(現、広島県立尾道東高等学校)
4年間通った母校。「巷に來れば」の記念碑がある。林芙美子七回忌に除幕。裏面の「林芙美子記念碑」の文字は川端康成の染筆によるもの。

⑯文学のこみち
千光寺山ロープウェイ山頂駅近くから千光寺に続く遊歩道。林芙美子の「放浪記」、志賀直哉の「暗夜行路」など自然石に刻んだ文学碑がある。

参考：尾道と林芙美子・アルバム、青空文庫、観光ガイド・高垣俊雄氏作成文(2010.8.28)
資料提供：尾道市観光課、尾道学研究会、尾道学文庫、おのみち林芙美子記念館